

勅使街道

勅使街道（「天皇の使者の道」）は、宇佐神宮に通じる歴史的な道で、勅使という、天皇に代わって宇佐神宮の神々へ供物を捧げたり参拝したりする使者が、長い間通ってきました。勅使街道という名前は、かつては九州北東部の重要な交易路の内の今より長い部分を指していましたが、現在は化粧井戸と呉橋（宇佐神宮境内への西側の入り口の一つ）の間の道路の部分を指しています。勅使街道は一直線に約 1 キロ伸びており、太陽が丁度良い角度に沈む時は、特に美しい景色を眺めることができます。

旅の芸術家であった蓑虫山人（1836～1900）の絵日記には、1864 年の勅使行列の絵が含まれており、当時の勅使街道の様子や、天皇陛下の使者の様子の貴重な視覚的記録を提供しています。現在では、勅使は臨時奉幣祭へ参加するため、10 年に 1 回宇佐神宮へ派遣されます。勅使が移動する道のりは近代的な交通機関の登場によって変わりましたが、今でも伝統を尊重して、勅使はその道のりの一部を勅使街道に沿って歩きます。

今はもう、勅使街道は宇佐神宮への主な参道ではありませんが、勅使街道には、化粧井戸、凶首塚古墳、百体神社、そして宇佐の伝統的な工芸の一つであるひょうたんを使った商品を作る専門店など、まだいくつかの注目すべき場所があります。2020 年には、宇佐神宮に向かう勅使や無数の巡礼者がかつて旅した道を守りながら、地域の雰囲気維持のために細心の注意を払って改修が行われました。電柱や送電線がシンプルな街灯に置き換えられ、道路は石畳のモチーフで再舗装されました。百体神社の前の道には、発掘調査で発掘された元々の勅使街道の石が装飾的な舗装として使用されています。